旧満州の小さな足跡

中村京子

青山ライフ出版

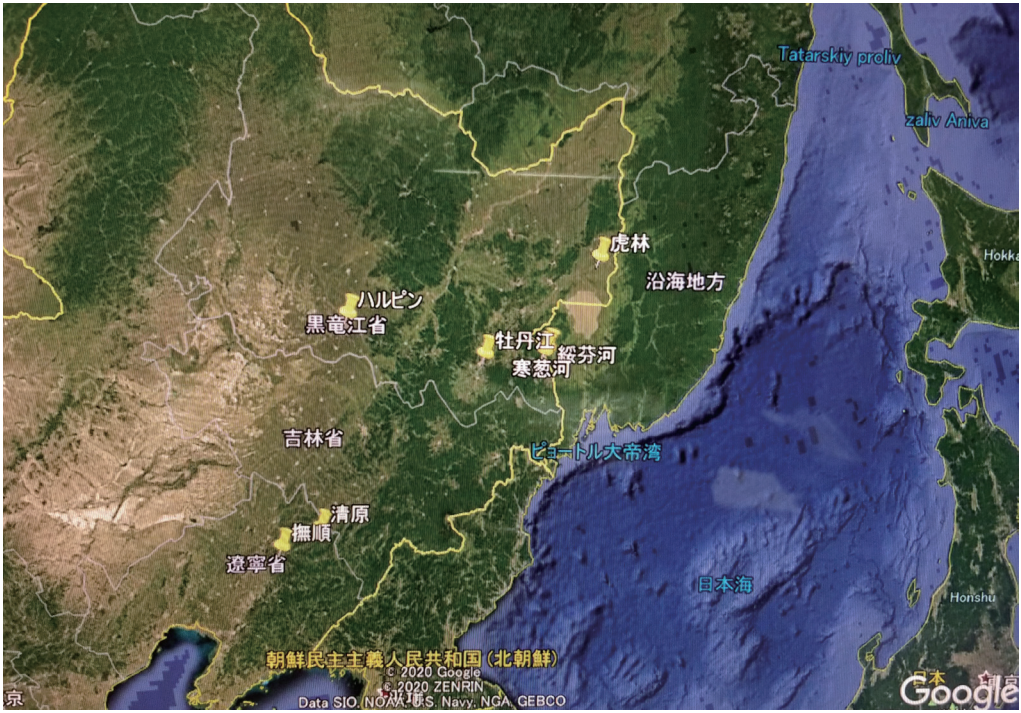
はじめに

その時から７８年を数える２０１９年５月、太平洋戦争を挟んで、３歳から１２歳までの小さな足跡が残る旧満州を訪ねました。旧満州を覆う耐え難い歴史の壁、当地の一般情報不足に阻まれ、引き揚げという苦難を乗り越えて、なお懐かしい旧満州の日々。遠くなった記憶に今回の旅の記録を重ねました。

記録は小学校に入学した、ロシア国境に近い町、虎林、そして太平洋戦争が始まった年からです。

内容、言葉、ともに小学校４、５年生当時の言葉で書きました。

地図は今回訪れた旧満州の７か所です。



旧満州の小さな足跡　目次

はじめに　3

第１章　虎林（こりん）…… 8

虎林　9
在満国民学校　10
友達　10
妹　12
ここまでおいで　13
大畑先生　14
花火大会　15
魚釣り　16
兵隊さん　18
あらしの夜　18
兵隊さんのけんか　20
読経　21
学校生活１　23
学校生活２　23
アメリカとの戦争が
　はじまる　１２月８日　24
キジ狩り　25
アイスクリーム　25

第２章　寒葱河（かんそうが）……28

寒葱河　29
学校　30
藤さん　31

家 31
オンドル 32
大東亜共栄圏 32
村の中 33
お風呂と井戸 34
摘み草 35
赤と黒 35
お腹が空くと眠れない 36
特訓１ 37
特訓２ 38
特訓３ 38
綏芬河（すいふんが） 39
妹よしこちゃん 40
ヘビ 41
タヌキ 42
キツネ 45
オオカミ 46
キジやカモ 47
サケの魚 48
ナマズ 48
スイカ 50
キノコ 51
餃子 51
凍りリンゴ 52
凍傷 53
長い刀 54
クッキー 56
遠足 56
ソ連の陣地が見えた 57
牡丹江へ 58
慣性の法則 59
牡丹江 60
転勤 61

第３章　清原（せいげん）……65

清原　66
学校　66
満州の人の家　67
ヒル　69
母の病気　70
運動会　71
戦争ごっこ　71
学芸会　72
スケート場　73
アイスホッケー　75
敵艦激沈　76
プレゼント　76
お誕生会　79
竹やり　80
飛行機　81
父の召集　８月１４日　82
１９４５年８月１５日
重大放送　82
駅が騒々しい　８月１５日　84
砂糖の配給　８月１６日　85
銃剣を向けられて
８月１６日　86
屋根裏部屋　88
襲撃　８月１７日　89
避難の家　90
死について　93
おはぎを持って　８月１８日　94
清原脱出へ　８月１９日　98
清原をあとに　100

第４章　撫順（ぶじゅん）…… 103

撫順到着 104
永安小学校 105
大里先生宅　８月２０日 106
坊主頭 106
ソ連兵１ 107
ソ連兵２ 108
子どもたち 110
紅軍が来る 111
私は本を持っていない 112
父の話１ 113
父の話２ 114
父の話３ 114
生菓子売り 114
粟もち 115
たばこ売り 116
くすり運び 116
すりに襲われる 118
和裁 119
ピーナッツ 120
有馬さん 121
にげろ 122
引き揚げ開始 123
養女の話 125
出発の朝 126
コロ島 127
満州とのわかれ 128

おわりに 130

第１章　虎林（こりん）

虎林

中国北東部の地図を開くと、虎林（こりん）という町はソ連国境から、わずか５０キロメートルほどの所に、見つけることができる。

昭和１６年の春、父は虎林の町の小学校の校長として、私たち家族を伴い、この町のプラットホームに降りた。父３４才、私は６才だった。

私の虎林の町の記憶は、このプラットホームの端にあった小さい駅舎から始まっている。

駅から踏み固められた一本の黒い道が北の方に伸び、小学校の辺りで終わっていた。日本人の通う小学校をこの頃、在満国民学校といった。

小学校の北一帯は丈の低い雑草に覆われた空き地で、その真中辺りにポツンと二軒、小さな家が南を向いて並んでいた。私たちの家はその二軒の西側で、学校へは空き地を歩いて通えた。家の北側の玄関を出ると、少し立派な東西の道がついていた。そこから、北側一帯に、日本人の住宅が建っていたが、建築中のものが多かった。この住宅は町外れの小高い丘のふもとまで続いていた。

この小高い丘を私は「花の丘」と呼んだ。この丘に樹木は見られなかったが、小さな野性の花々が丘を埋めている感じだった。スズランの小さい花、見たことのない色のユリの花、名前を知らない小さな花々、丘には季節の花が咲き乱れていた。雪どけのまだ肌寒い頃、雪の下に黒い土を見せて、春の訪れをつげていた丘。雨に濡れた丘、丘は季節を演出する舞台のようであり、私の虎林は、この丘であった。

在満国民学校

「さあ皆さんお歌を歌いましょうね」背の高い男の先生の、やさしい言葉使いとやさしい声が耳に異様に響いた。「とてもお上手ですよ」先生のほめことばがくすぐったく、幼児のような扱いにとまどい、足をぶらつかせながら、まわりを見回すと、みな真剣な顔で先生の方を見ていた。

春の光が窓ガラスを通してやわらかい。遠くの教室から上級生の歌声が聞こえていた。同じところを２度、３度とくりかえし練習している。初めて聞く歌だった。あんな歌をはやく習いたい。もれ聞こえてくる、遠くの教室の歌声に聞き耳をたてた。「……歌詞ははっきりしないけれど、白い大きな船が紙テープを散らして、港を出ていくところか、それとも長い航海から帰って来た船が人々に迎えられている歌なのだろうか。青い海をバックに。白い船が波止場をゆっくり旋回し、人々の声が、さざめきが、そして、花束が振られている。

歌詞をおぼえたいと、さらに聞耳を立てたが聞き取れない。そのうちに歌声は止んでしまった。もう一度歌うだろう、と待った。しかし、歌はもう聞こえてはこなかった。そして、その後も、もうこの歌を聞くことは無かった。この歌は私に春の光と白い船を残した。

友達

学校に行きはじめるとすぐ友達が出来た。どんなきっかけで友達になったのか思い出せないが、友達の家に初めて行った日の驚きは、今なお鮮やかに思い出される。